

剣風



事務局 〒330-0074
さいたま市浦和区北浦和5-6-5
浦和合同庁舎4階
Tel (048)834-8869
Fax (048)834-8879
<http://www.saitama-kendo.or.jp>
(編集責任者 豊島正夫)

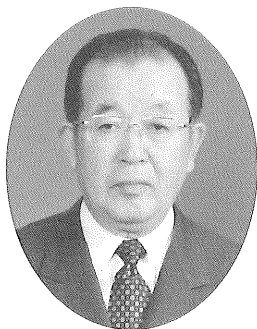
第6号 平成26(2014)年6月19日発行

(題字 野澤 治雄会長)



「サムライの金字塔」発刊に想う

埼玉県剣道連盟名誉会長 範士 大久保和政



かつて私は、埼玉県剣道大会参加者全員に“檄”として日本剣道のあり方についてかなり辛口のコメントを発表した。その内容では、「修業・修行」を紹介した。修業とは“業を習い修め”、修行とは“利害得失から離れ悟りを開くための道”、と要約できるが、みなさん剣道をどのように取り組んでいるか考えましたか。近年、日本の伝統文化である剣道を、日本人よりも広く・深く研究心を持ち真剣に学んでいる海外の剣士が多い。剣道は技術向上は勿論であるが、剣の道の体得とは、心の

修行において、道徳・精神面を強化し、武道教育としての工夫と研究に精進し、人格高潔を発露することのできる人材育成を心掛けなければならない。それを怠れば、いずれ、剣道を逆輸入する日が来るかも知れぬ。そんな危機を感じ、伝統文化の剣道を継承して欲しいと強く願うのです。

今回、縁あって1冊の書籍を出版させていただいた。その本では、「目的」と「目標」の違いを混同されている方が多く居られることから、その違いを明確に区別して欲しいと記した。剣道の目的は言うに及ばず「人間形成」であるが、現在は、勝利至上主義から「勝利」を優先し過ぎている感がある。勝利するとは、あくまでも「稽古」の目標に過ぎない。剣道とは「人間形成」と言う目的があるからこそ、指導する者は「剣の道」に役立つ効果を追求し、技術だけに偏らず、精神を求め、併せて理論武装することも大切であり、日頃よりの工夫と研究を怠らず、豊富な知識を得た上で文化の伝承に当たるべきで、それには、目的と目標を分離できなければ、到底達成することは不可能である。「修行と修業」と「目的と目標」の定義を理解せずにはいられず、指導者も指導を受ける側も致命的な損失を被ってしまう。折角の稽古が、貴重な時間を浪費するばかりで何も生み出さないものになってしまう可能性がある。また、古来より「剣道をするとうまく良くなる」と言われてきたが、「サムライの金字塔」では、脳科学者の力を借りて、「育脳」に関することも取り上げている。これは既に、他のスポーツ界では「育脳効果」に着目し脳を活性化させるトレーニングの研究が進んでいる。育脳により飛躍的に効果を挙げることができ、オリンピックや世界大会等で大きな成果を残している。剣道も、百年在り来りの指導に頼るのではなく、勝負脳を理解と育脳を意識した練習法を取り入れなければ、まったくもって剣道の効果や魅力が半減してしまうので、真理の研究が肝要なのだ。それは、稽古の在り方、指導の工夫、新知識の導入、そして学ぶ意欲にある。その指導法の1つとして欲しいのが、埼玉が生んだ剣聖高野佐三郎先生の「落とす剣道、落ちる剣道」である(韓国では既に実施している様子)。しかし、これを教える側が熟知していないようでは話にならない。そのために指導者は創意工夫による指導法を展開することが必要不可欠の時代なのである。意志あるところに道は開ける。意識を変えれば創造する世界も変わる。日本の文化遺産である剣道を正しく伝承するためにも、皆さんが、各自「サムライ」の心を心とし輝いた「金字塔」を打ち立てていただきたいと切に願い、このたびの発刊に到ったのである。

「大会記録この1年」(2014年前期)全国大会(上位)入賞結果・県予選会結果(報告)

順不同

——全国大会予選——

- 第62回都道府県対抗優勝大会県予選(2・2)
 - 次鋒 持井亮紀(越谷) 五将 橋本桂一(東松山)
 - 中堅 草深将也(越谷) 三将 東永幸浩(警察)
 - 副将 内田貢市(東松山) 大将 金田孝行(警察)
 - ※先鋒 田中晃司(本庄第一) <県剣道大会>
- 全国福祉祭剣道交流大会県予選(4・13)
 - 先鋒 甲村龍彦(北本) 次鋒 穂谷野一敏(上尾)
 - 中堅 立山健治(朝霞) 副将 片倉博己(杉戸)
 - 大将(監督) 川下紘生(久喜)
- 第6回全日本都道府県対抗女子剣道大会予選(4・13)
 - 先鋒 河嶋香菜子(本庄第一) <関東予選>
 - 次鋒 遠藤知穂(久喜) 中堅 中西直子(越谷)
 - 副将 村山千夏(警察) 大将 内野尚美(所沢)
 - 監督 堀川智子(越谷)
- 国体予選(5・24)
 - ・成年男子
 - 先鋒 川上宗真(北本) 次鋒 嶋田貴文(警察)
 - 中堅 東永幸浩(警察) 副将 金田孝行(警察)
 - 大将(監督) 齋藤茂樹(加須)
 - ・成年女子
 - 先鋒 渡會愛梨(高校) 中堅 村山千夏(警察)
 - 大将(監督) 市村麻美子(朝霞)
- 全国教職員剣道大会予選(5・24)
 - ・男子団体代表(個人を含む)
 - 小野内悠介(鴻巣吹上小) 中山直樹(本庄東中)
 - 後 雄士(大宮東高) 菊池道隆(上尾高) <副将>
 - 吉長英二(浦和市立高) <大将>
 - ・女子の部 渡會愛梨(筑波大坂戸高)
- 県女子剣道選手権大会兼全日本女子予選(5・25)
 - ①村山千夏(警察) ②高橋佳菜子(警察) ③田中尚子(上尾)
- 全国高校剣道大会予選個人(5・31)
 - ・男子 ①田中晃司(本庄第一) ②元吉雄弥(埼玉栄)
 - ③内田峻介(松山) ④新井功次郎(本庄第一)
 - ・女子 ①酒井詩織(淑徳与野) ②埜口志穂(伊奈学園)
 - ③小島彩加(埼玉栄) ④中山美紗(市立川口)
- 全国高校剣道大会予選男女団体(6・14、15)
 - ・男子団体 ①本庄第一 ②市立川口 ③埼玉栄 ④伊奈学園
 - ・女子団体 ①埼玉栄 ②本庄第一 ③伊奈学園 ④市立川口

——関東大会予選——

- 関東高校剣道大会予選
 - ・男子団体出場校(7校)(4・26)
 - ①埼玉栄 ②市立川口 ③本庄第一 ④松山
 - ⑤伊奈学園 ⑥熊谷 ⑦春日部
 - ・女子団体出場校(7校)(4・27)
 - ①埼玉栄 ②市立川口 ③与野淑徳 ④久喜
 - ⑤本庄第一 ⑥東農大三 ⑦昌平
 - ・男子個人(5・2)
 - ①田中晃司(本庄第一) ②元吉雄弥(埼玉栄)
 - ③小宮山颯(鷺宮) ④有馬遼太(伊奈学園)
 - ・女子個人
 - ①河嶋香菜子(本庄第一) ②大島愛寧(本庄第一)
 - ③埜口志穂(伊奈学園) ④小早川裕美(川口総合)

——県内大会——

- 第58回埼玉県剣道大会中学生の部(11・8)
 - 男子 ①泉 英太(北本中) ②蒔田駿介(新座五中)
 - ③大嶋賢治(桶川中) ④鈴木悠誠(北本中)
 - 女子 ①河森明依(大沼中) ②岩崎 萌(大沼中)
 - ③磯優莉香(新座第二) ④森田菜月(所沢中央)
- 第58回埼玉県剣道大会中学生の部(11・14)
 - 男子 ①田中晃司(本庄第一) ②菅原崇誠(市立川口)
 - ③遠藤敬太(浦和南) ④服部恵介(城北埼玉)
 - 女子 ①酒井詩織(淑徳与野) ②河嶋香菜子(本庄第一)
 - ③櫻井悠賀(大宮東) ④小早川裕美(川口総合)
- 第58回埼玉県剣道大会一般の部(11・23)
 - ・夫婦の部
 - ①中谷有伸、ゆみ(川越) ②葦塚雅司、恵利子(本庄)
 - ③内野保、尚美(所沢) ④末武秀尉、あさ美(川越)
 - ・女子の部
 - ①濱本佳菜子(警察) ②萩原愛子(越谷)
 - ③中西直子(越谷) ④菊地美穂(高校)
 - ・四段以下の部
 - ①篠田康平(警察) ②田島純一(警察)
 - ③小林竜也(北本) ④中山晃一(東松山)
 - ・五段以上の部
 - ①平野伸一郎(警察) ②本間将光(警察)
 - ③石山邦良(東松山) ④東永幸浩(警察)
- 埼玉県高齢者剣道大会(5・25)
 - ・60～65歳の部
 - ①加藤一郎(川口) ②山中完悟(北本)
 - ③小池俊文(飯能) ④久保和秀(西入間)
 - ・65～70歳の部
 - ①島村 勉(羽生) ②馬場幸次(大宮)
 - ③筑井祥二(深谷) ④綾部登久(川口)
 - ・70歳以上の部
 - ①渡辺秀男(東松山) ②澤山勝三(上尾)
 - ③若林 忠(東入間) ④櫻井輝男(入間)

——関東大会——

- 関東高校剣道大会(6・7、8 前橋)
 - ・男子団体 準優勝 市立川口 ⑤埼玉栄
 - ・女子団体 ⑤埼玉栄
 - ・優秀選手 菅原崇誠(市立川口) 元吉雄弥(埼玉栄)
 - 小島彩加(埼玉栄)

スポットニュース

文部科学省委託 武道等新規推進事業 「授業協力者養成講習会」の開催

標記について本連盟では、平成26年2月22日埼玉県立武道館で、講師に佐藤義則・原義克・矢部勇介・八坂和典各講師により、90名の受講者が参加(内訳は、8段2名、7段38名、6段21名、5段15名、4段13名、3段1名)し行われました。

参加者からは「教科体育と部活動指導の違い」や「生徒の目線にたつ指導の大切さがわかりました」などの感想がありました。

今年度は、9月18日(木)さいたま市大宮武道館で開催いたします。つきましては、各加盟団体に7月中旬頃に送付いたします「授業協力者養成講習会要項」をご覧ください。多くの会員の参加をお待ちしております。(募集人員：先着50名) (佐藤 義則)



「八段選抜に3位入賞を遂げて」

教士八段 大澤 規男



平成26年4月12日、名古屋市で開催された全日本選抜剣道八段優勝大会で第3位という結果を残すことができました。これもひとえに、ご指導をいただきました先生方のお蔭と心から感謝を申し上げます。

さて、この大会の歴史を振り返り見ますと、昭和52年から平成14年までの26年間、愛知県明治村無声堂で開催された八段戦を全日本剣道連盟が継承し現在に至る歴史のある大会です。そして、今でも忘れない昭和52年の第1回大会で埼玉を代表して出場された市川彦太郎先生と榎崎正彦先生が決勝で戦われ、激戦の末に榎崎正彦先生が優勝、市川彦太郎先生が準優勝、市川彦太郎先生は翌年の同大会でも決勝に進まれ2年連続で準優勝、その後は、大久保和政先生の第3位、加治屋速人先生の準優勝と続き、平成17年には山中茂樹先生が優勝され、埼玉の多くの先生方も歴史を作られた伝統ある大会です。その大会の案内状を頂いたのは昨年の大会でした。

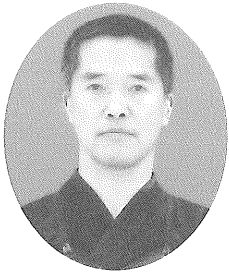
その時はまさに青天の霹靂、信じられない気持ちでしたが、選ばれた限りは埼玉の代表として恥じない試合をしようと思って大会に臨みました。去年は、準々決勝で東京の石田利也先生に延長の末敗退、その時の反省点は、実力の差は当然ですが、無心で戦うと決めて臨んだ大会にもかかわらず、試合中「勝ちたい、負けたくない」と言う雑念が生じてしまったことでした。試合は誰しも勝ちたいと思い戦うのは当然ですが、その勝ちたいと思う心が強過ぎると心気力の一致を乱してしまい不甲斐ない試合展開となってしまいます。

去年の試合を反省して本年の出場に際しては、心の働きに関する書物をもう一度見直し、心の置き所について取り組んでみました。その中で感じたことは、人間誰しも結果を恐れるがために自分を守ろうとする、そこに人間の欲が生じ本来の自分を取り乱してしまうと記されていました。ではどうすれば欲が無くなるのか自分なりに出した結論は、「無になるイコール欲を捨てる事」でした。

欲は自分の中で働くもの、自分で欲を発しなければ問題はないわけです。しかし、無になろうとすればかりに執着してしまうと逆に無ではなくなり欲となる。山岡鉄舟は、宴の席上で友が嘔吐した物を僧侶の前ですすり食べたとありましたが、まさに物事全てに対する拘りが無い「無の世界」だと思いました。そこまで無になれる人は少ないと思います。私は、これから起こり得る全てのことに對し執着心を捨て、現実に対して自分を素直に出すことだけを思い戦いました。すると、1回戦から負ける事の恐怖心は無く、自然と捨て切った技が出せていました。準々決勝の石田利也先生に打った初太刀の面は、まさに無の面でした。準決勝は、愛知県の東良美先生に負けましたが、面が捨てきれたので十分と心に言い聞かせ残り時間を戦ったところ、途中、打ったことがあまり無い返し胴をだしていました。結局試合は敗退しましたが爽快な気分でした。でも、正直言って準決勝で1本1本の勝負になった時、「ここまで来たら決勝に進みたい」という欲が^{よき}過りました。反省、まだまだ修行は続きます。

私の修行時代 「自分に厳しく」

教士八段 加治屋 速人



私は、中学1年から学校のクラブ活動で剣道を始めました。

当初は全然面白くなく、夏休みの稽古に1回も参加せず、こっぴどく怒られたのを覚えています。

私の中学は、町に3校あった中で最も弱かったですし、私自身もその弱い中学で一番強かった訳でもなく、高校に入学したら剣道はやめて勉学に励み、将来は教員になりたいと考えていました。

しかし、卒業した中学は、学力も低かったようで、高校入学早々に学力の差を感じ、挫折しました。勉強がだめなら剣道でという強い気持ちもなく、同級生に誘われるままに剣道部に入りました。鹿児島県の地方の高校ではありましたが、剣道は盛んな土地柄で、稽古はかなり厳しいものでした。元来負けず嫌いの性格ですので、いい加減な気持ちで始めた割には、厳しく鍛えられても剣道をやめようと思ったことはありませんでした。

3年生になりますと、顧問の先生も週に1回見ればいいほうになり、必然的に自分達で考える稽古になりました。そして最終的に私は、強くなるには自分に厳しく、自分で自分を作り上げていかなければならないという考えを持つようになりました。

高校を卒業するにあたり、高校時代の剣道成績が認められ、幸いにも大東文化大学から誘いがあり入学することになりました。

大学1、2年の時は、一番早く面を着け、当時の主将に掛かりました。また、3、4年の時は剣道部の寮にあった道場で時間を見つけては素振りや打ち込み等を行い、その結果かどうかはわかりませんが、1年からあらゆる大会に出場させていただき、それなりの成績を収め、将来も剣道を続けていきたいと思うようになりました。

大学1年の時に出場した国体において、埼玉県警の先生方にお世話になったご縁で埼玉県警に就職することになりました。ちなみにこの国体は、監督が故市川彦太郎先生、大将が故榑崎正彦先生、副将が大久保和政先生、中堅が根岸一雄先生、次鋒が清水祐介先生という錚々たるメンバーでした。

昭和51年に埼玉県警察官を拝命し、翌年に剣道特別強化訓練員に指定され、剣道中心の生活が始まりました。夢は大きく全日本剣道選手権大会優勝を目標としました。

特別強化訓練員の普段の稽古は、季節に関係なく切り返し、掛り稽古が中心で、特に真夏の稽古は厳しいものがありました。私は、日本一になるには日本一の稽古をしなければならないと考え、特練員の中で質・量ともに一番の稽古を心掛けました。また勤務時間外にも夜稽古等に参加し、休日は自分に必要な体力を身につけるためのトレーニングを実施しました。残念ながら、全日本選手権優勝はできませんでしたが、夢に向かって努力したことは決して無駄ではなかったと考えています。

現在、スポーツ界では「試合を楽しむ」という風潮があります。私もこれまで多くの大会に出場させていただきましたが、「勝たなければならない」という精神的なプレッシャーに苛まれ、最後まで「試合を楽しむ」という心境には至りませんでした。もう少し、精神的にゆとりがあったならば違った結果が出ていたのではないかと思います。そのプレッシャーに真正面から立ち向かっていったことに自分では満足しています。

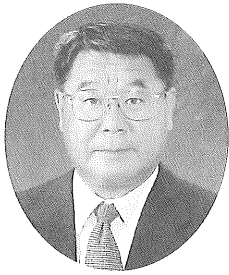
私は、「修行」というのは、自分が求めて行うものであり、他人から強制されて行うものではないと考えています。指導者の指導のもと、稽古時間が決められ行う稽古は「修行」と言えないのではないかと、あくまで自分で時間を作り、稽古場所を求め稽古することが「修行」ではないかと考え、普段の稽古と同様に自分の時間での稽古、トレーニングを大事にしてきました。特練員引退後は、極端に稽古量は減りましたが、この「修行」の部分を大事にしてきましたし、これからも「一生修行」を心掛けていきたいと考えています。



第59回埼玉国体・成年男子優勝チーム（平成16年10月）

埼玉の「甲源一刀流」－己を顧みて、人を謗せず－ 剣道

埼玉県剣道連盟 理事 池田 克生



甲源一刀流は、両神村薄（現在は小鹿野町両神薄）の逸見家に代々受け継がれてきた剣道の流派で、逸見太四郎義年（1747～1828）を開祖としている。義年は両神山で修業を重ね、溝口派一刀流の桜井五郎長政に師事して印可（免許）を受け、さらに工夫を加えて安永5年（1776）甲源一刀流を創始した。その由来は、逸見家が甲斐（山梨県）の源氏の末裔であることに因んで名付けられたものである。

義年から始まったこの流派は五代長英（1818～1881）、六代愛作英敦（1841～1924）の頃に秩父から武蔵北部に広まり往時は二千人あまりの門弟を数えた。義年の高弟としては中島家（武蔵国那珂郡）強矢家（秩父郡藤倉村）水野家（比企郡志賀村）

関口家（入間郡片柳村）比留間家（高麗郡梅原村）などがあり拡大に貢献した。門弟の中には農民が多く、「剣術は心術なり」として濃厚に精励しつつ厳しい修業と心の鍛錬を積んだ。

現在、九代逸見知夫治氏が甲源一刀流の伝統を受け継いでいる。自宅に併設された逸見家道場「耀武館」は道場形式の遺構をとどめ埼玉県の指定史跡になっている。

○甲源一刀流神文の事（入門時の誓約書）

「当流に執心の輩、この門に入らばすなわち芸の色を顧さず、内に剣術の心を断たず。当流を挙げんと欲して、他流を蔑するなかれ。もっぱら己を顧みて、人を謗せず。全心執心を擁して旦暮に懈怠せず。一たび一刀の街に入らば、妙剣の場に至らずんば、この門を出でず。今、信心の条を凝らし、神明に約して誓詞を旨とすること、くだんの如し。」

・ 剣術のできることを自慢しない ・ 常に剣術の心を忘れない ・ 他の流派を軽蔑しない

・ 自己を反省し他人を誹謗しない ・ 怠りなく稽古に励む ・ 当流の神髄を極めるまで門を出ない

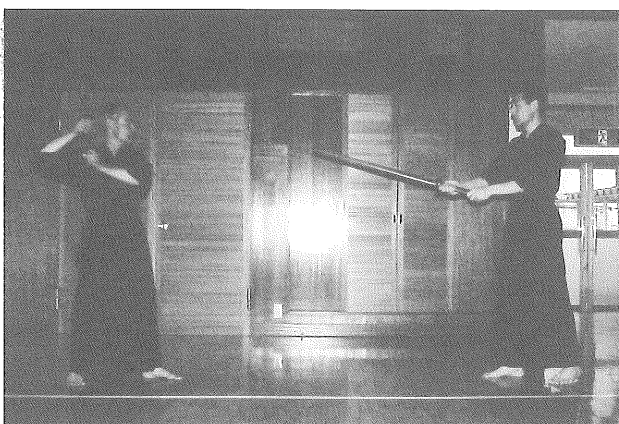
以上の6項目にわたり固く誓った上で、署名の血判を押し、初めて入門が許された。

○甲源一刀流剣道形

長剣20本（五天、陳頻組、残心組、刃切合組）、小太刀5本が定められる。「位取之辨」として上段、勢眼、下段、八相、隠剣の5つの構えで構成されている。

甲源一刀流においては、平青眼の構えが多く、敵の太刀を摺りあげ、切り落として敵を切り倒すことを「当流の真となす」とあるとおり、音も無く、摺りあげ、切り落とす実戦的な形が一連の流れとして定められている。

中里介山の有名小説「大菩薩峠」の第一巻が「甲源一刀流の巻」であるが、主人公机竜之助は「音無の構え」の使い手とされている。映画化にあたり「音無の構え」がいかなるものか不明で、中西派一刀流宗家の高野弘正剣道教士（佐三郎の弟）に型を創造してもらふこととなり、中里はできあがった型に惚れ込み、高野先生を竜之助役に推挙したという逸話も残る。甲源一刀流と小説の結びつきの浅からぬ関係が感じられる。



甲源一刀流型稽古



甲源一刀流逸見家道場「耀武館」

参考文献 甲源一刀流資料館資料
酒井塩太著「甲源一刀流」
埼玉県歴史と文化の博物館「埼玉の武術」資料

第2回コンバットゲームズ大会

(ロシア・サンクトペテルブルク) 演武参加を顧みて

居合道 範士 山崎 たかしげ 誉

ロシア・サンクトペテルブルクの街は、10月半ばと言うのに道路は凍結、厳しい寒さでしたが、巨大なスタジアムの中やホテルの中は程良い暖房が利き、快適でありました。

この度、世界の武道15団体による各2日間のコンバットゲームズ大会の演武では、剣道形・居合道・杖道(梯・浅野範士、河口・山崎・草間範士、釣賀・藤崎教士)の7名が参加いたしました。

大会1日目の開会式後、美しく力強い日本剣道形、続いて居合道の3名が全日本剣道連盟居合12本を順序よく演武しました。前日の打ち合わせ通りに3名一緒に三方に分かれて、二方から中心に居る河口範士に向かい、1本目「前」より12本を各先生方共修業の過程の力(業)を全身全霊を打ち込み、全力で演武を致しました。演武前の練習では、入念に呼吸を合せて大会に臨み、程良い緊張感の中、場内の静寂の中で演武者と観客とが目に見えない絹糸で心と心が繋がった様に感ぜられました。

居合道の教本には、「演武の心得」が明記してあり、全て要義が有り、動作が明記されて居り、四肢身体が動作通りに自由自在に動かなければ要義に反する事になり、理事一致にはならず、互いの稽古において理事一致の業に成る様苦勞するのであります。



演武に入る(左より)山崎誉・河口俊彦・草間^{じゅんいち}惇壹各範士

コンバットゲームズ大会に於いての演武も、その一端を披露し、大会を祝したのであります。

日本剣道形・杖道の形も全日本剣道連盟で定めている形を惜しむ事なく発揮されておられたと拝見した次第です。

「云うは易し、行ふは難し」要義通りの演武は難しいのでありますが、2日目決勝戦前に再度演武させて頂きました。

コンバットゲームズ大会の終了事に、審判長の講評の中で、演武者に対して「大会に華を添えて頂いた」と労いの言葉を頂き安堵いたしました。

剣道競技では、男女6種別の大会が行われましたが、1日目の若い方々の試合は、子供の頃より基本をしっかりと教えられ鍛えられて剣道の体に成長され、素晴らしい試合が拝見出来た。特に、2日目の特別招待選手の8段戦は見応えがありました。決勝戦は日本人同士(谷選手と古川選手)の対戦でしたが、敗れはしたが谷選手は私の理想とする立ち姿で、姿勢を崩さず剣先で終始攻めて相手の技を引き出して技を出し決めるところは天性かと受けとめ、剣道も正しく練り上げれば谷選手の様な立派な心技になるのだと敬服した次第で、又剣道を一層好きにさせてくれた一戦でありました。

合同稽古では、武安会長自ら剣道具を着用、元立で稽古した姿は感銘を受けた。8段の元立の先生方に列をなし自分の番を待つ姿も印象に残っています。

全体を通じ、素晴らしい試合内容と大会運営に心より敬意を表するものであります。

本大会が益々発展し、全世界に心と心の通う武道精神が高まる事を期待します。

その中で居合道の鞘の中(うち)の心「切るな・切らすな・親切丁寧に説法して改心せしめよ!」の精神で生涯を通じて人間形成の道に繋がりたいと考えます。



演武会場前の山崎・河口・草間範士

加盟団体紹介 (その⑥)

警察剣道連盟 ～剣道上位段位の取得を目指して～

会長：瓜田 勝美 事務局：藤田 利美



1 沿革

警察剣道連盟は、昭和37年3月に埼玉県剣道連盟の下部組織として発足し、公益財団法人埼玉県剣道連盟との緊密な連携の下に、会員の心身の修練による職責の遂行及び剣道の振興並びに会員相互の親睦を図ることを目的としています。

2 活動状況

(1) 連盟内の主な活動

全国警察剣道大会、全国警察剣道選手権大会、関東警察剣道大会、埼玉県警察民警親睦剣道大会、埼玉県警察剣道大会、埼玉県警察少年剣道大会、講習会及び昇段審査、寒稽古・暑中稽古等幅広く活動を行っています。

(2) 連盟外の主な活動

世界剣道選手権大会、国民体育大会、全日本都道府県対抗剣道優勝大会、全日本剣道選手権大会、全日本女子剣道選手権大会、全日本東西対抗剣道大会等に連盟内から選手として多数出場し活躍しています。

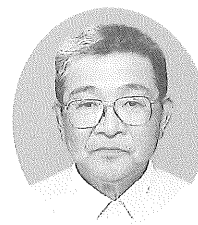
3 今後の目標

県民の期待に応える力強い警察活動を推進していくためには、警察官一人一人が、現場で対峙した相手に負けない強じんな体力、技術、気迫等を有する必要があります。これらは、平素からの剣道を中心とした術科訓練により培った気迫及び技によって養成されるものであります。

そこで、剣道の上位段位を取得することにより、自信を持って適切な職務執行ができる警察官の育成を図り、仕事に対する使命感と誇りの醸成を図ることを今後の目標としていく所存であります。

深谷剣道連盟 一剣道を生涯の友とする少年剣士の育成一

会長：剣持 昭夫 事務局長：土田 毅



1. 沿革

昭和27年、深谷剣道連盟は「深谷地方剣道連盟」と称して創設された。これは、深谷行政管内（深谷町、藤沢村、幡羅村、明戸村、大寄村、中瀬村、新会村、八基村、岡部村、本郷村、榛沢村）の剣道愛好者が一丸となって創設したものである。昭和27年(1952)埼玉県剣道連盟が設立されてすぐに加盟登録し今日に至っている。昨年は、60周年を迎え記念誌を作成して、創立60周年記念式典（平成25年1月12日）に埼剣連の先生方をはじめ県北の先生をお迎えしてお祝いしたところである。本連盟の初代会長は森田高義先生、第2代会長に木村茂登彦先生、第3代会長に関口善行先生が就任し、今日の充実した組織になっている。

2. 活動状況と今後の抱負

本連盟が特に力を入れているのは、少年剣道教室の充実である。子供たちの稽古は毎週日曜日の18時～19時30分まで行い、その後一般の定例稽古会を行っている。少年剣道教室は、ここ近年の少子化時代においても毎年一定数の子供が入会し80名の大所帯である。現在は8名の指導者（5段～7段）を指定して、経験、学年、力量に合わせて5グループ編成を行い、レベルに応じた正しい剣道を教えている。稽古時の体育館内は大勢の保護者が子どもたちの稽古を見学している。また、第1週の日曜日は一斉指導稽古日と定め、剣道連盟の先生方に元立ちをお願いして、稽古をつけてもらえる機会を作っている。このように、本連盟は組織をあげて少年剣士の育成に努めているところである。

さらに、昇級審査会は6級から1級まで定め、少年剣士の励みとやりがいになっている。深谷市民大会を始め、対外試合は、寄居、児玉郡市、小鹿野、妻沼、榛東村等の各大会、東日本ジュニア大会等に参加している。また、毎年深谷剣道連盟が主催する初稽古会（1月）、暑中稽古会（8月）に多くの少年剣士が参加して盛り上げてくれている。少年剣道教室の主な行事は、8月の夏合宿（1泊2日）、1月の少年剣道大会である。それらを通して保護者との連携、会員相互の親睦が図られている。

今後の抱負としては、時代を継ぐ青少年の育成を図り、会員一同が切磋琢磨し、深谷剣道連盟の発展と剣道の普及発展に努めていく所存である。

西入間剣道連盟 一剣徳悟道一

会長：栗原 昇 事務局長：井川 紀彦



1. 沿革

本連盟を構成している坂戸市、鶴ヶ島市、毛呂山町、越生町、鳩山町では、江戸～明治への流れのなかで、甲源一刀流、天然理心流、神道無念流の3流派の道場があったとされています。

昭和20年の終戦で、しばらく剣道は中止となりましたが、昭和26年頃から地域の有志によって剣道も徐々に復活しました。

昭和40年頃より、小学生を対象とした剣道教室が各地に開設され、剣道の復興に拍車をかけ、昭和49年西入間警察署の設置が決定したことから、連動連盟西入間支部の結成準備が進められました。

当時、清水辰男、関口延清、宇津木輝勝、片倉博己、木村公一（以上坂戸）、正木泰雄（越生）、村瀬博一（毛呂山）、安齊実（鶴ヶ島）、小峰東一郎（鳩山）などの有志により、特に茂木光雄埼玉剣連副会長のご指導をいただき、昭和49年4月21日、西入間警察署道場において、来賓、関係者が多数出席し、西入間支部が発足しました。

2. 活動状況と今後の目標

本連盟の主な活動は、連盟稽古会を毎週水曜日午後7時30分から9時、坂戸市民総合運動公園剣道場にて実施しています。会員はもとより他連盟の先生方、小・中学生も数多く参加し熱心に稽古を行っています。

また、本連盟の特色ある事業の一つとして、年末に開催している「30人立切試合」があります。3分×30人、90分間の試合を行います。毎年2名の元立者が体力、気力の全てを出して立ち切っています。

本連盟では「剣徳悟道」という言葉を掲げ、「剣道を修業すればする程に人格、品性が養われ徳となる。更に理合の究極を求めて努力すれば悟りが開ける」意として連盟の努力目標としています。

今後も地域との連携、会員相互の交流を図りながら「剣徳悟道」を目指して活動していく所存です。

幸手剣道連盟 一新たな出発一

会長：並木 欣次 事務局長：鈴木 晃



先般、新たな幸手剣道連盟の設立総会が行われました。

というのは、初代故内田喜代先生から引き継がれました連盟は、青木利雄先生、故松本操先生、故野村利春先生という、歴代の先生方のご指導によるお陰で今日に至りました。

そこで、昨年までは会費という負担をかけずに会の運営がなされてきましたが、そこには会への関心が薄くなり、また、責任感も乏しくなりつつある現象がみられるようになりました。

ここで、これからは連盟を一新し、次代を担う子供たち、青年層のために連盟を再結成し、新たなスタートをしようと思う会員の皆様が一致団結して、会費をいただくようにして再結成しました。

現在、一般三段以上の方々60名の登録をいただき、今後の幸手剣道連盟の力強いスタートが切られました。今後とも関係各位のますますの御指導と御鞭撻を切にお願い申し上げます。

あとがき 『剣風』第6号は、名誉会長大久保和政先生の格調高い巻頭言をはじめとして、池田克生先生の甲源一刀流の逸話、そして八段選抜大会で3位になられた大澤規男先生の喜びの声、そして支部紹介、大会記録と盛りだくさんの内容で構成することができました。大久保名誉会長のお話は近著に因んで武道としての剣道がいかなる道を歩むべきかを改めて学ばせていただける内容です。また、池田先生の甲源一刀流のお話の中で引用された「神文の事」の中の一節「この門に入らばすなわち芸の色を顕さず、内に剣術の心を断たず。当流を挙げんと欲して、他流を蔑するなかれ。もっぱら己を顧みて、人を誇せず。」はまさしく人間形成の道としての剣道のあり方を説いたものとして出色といえるでしょう。

本連盟も公益財団法人化してますます社会の各年代層の修行をされる人々の生涯にわたる人間形成のあり方を支える活動をしていくことを念じて進みたいと存じます。

（瀧澤利行）